

情熱を傾けて 10 余年 ぶれない信念が道を拓く

ワークライフ支援委員会前委員長 庄司逸雄会員（横浜西）にきく



平成 15 年、横須賀からボランティアチームでスタートした当会の出前授業。横須賀支部の新倉邦夫副会長（当時）の働きかけにより、当会の事業として検討すべく、平成 17 年に学校教育プロジェクトチームが発足した。そのチームに総務委員として参加された庄司逸雄会員は積極的に具体案を発信し、中心的是役割を担った。翌 18 年に発足した学校教育実施委員会（現ワークライフ支援委員会）に委員として参画した庄司会員は初代委員長に就任。今期で退任されるまでの約 11 年間、委員長として新倉会員と共に創成期を支え、約 3 万人の生徒に授業を行う活動に育て上げた。退任にあたり、今までのご苦労や今後を支える会員へのメッセージを伺った。

——学校教育活動に携わることとなったきっかけは。

平成 17 年 7 月、新倉さんと、当時研修委員会の荒井（三和子）さん（藤沢）、調査研究委員会の小宮（広樹）さん（横浜南）、政治連盟の広瀬（幸一）さん（藤沢）、総務委員会の私の 4 人が中心になって学校教育プロジェクトチームが発足したんですね。この年の 10 月、日本大通りの神奈川県教育委員会で「社労士による学校教育」について PR を行って、法律分野の区分説明を広瀬さん、授業のスキームを僕が説明しました。

——元々学校教育にご関心があったのですか。

平成 15 年 10 月、ボランティアによる授業が横須賀市で先行していたけれども、僕はその頃のことは知らなかった。ただ、プロジェクトチームに入って、「生徒に授業がしたい」という気持ちが高まり、「自分が授業をするなら」というものをスキームにしました。

議論に積極的に参加したためか、平成 18 年 9 月に発足した学校教育実施委員会の委員長に互選されまして（笑）、誰もやったことがない新しい分野だったので、とにかく楽しかった。

——委員会が発足して、どのような PR 活動をされましたか。

平成 18 年 3 月、県教育委員会のキャリア教育担当者が集まる研修会に呼ばれて、僕たちが考えている社労士による学校教育を披露しました。その際に、安全衛生に関する話をした。その時、私がハインリッヒの法則を「1 対 30 対 300」と言ったら、ある先生に「1 対 29 対 300 ですよね」と指摘された（笑）。平成 19 年 9 月には、荒井さんと一緒に藤沢市の中学の校長会でもお話させていただきました。

——PR 活動の成果はいかがでしたか。

県のキャリア教育担当者への研修の後、ドカドカと高校の授業の依頼が来ましたよ。最初に依頼があったのが、

氷取沢。事務局に電話があった。残念ながら1回で終わってしまいました。それから白山、横浜旭陵と依頼が来ました。

——これまで横須賀で独自に授業をしていた新倉会員と授業をどのように行うか、話をされましたか。

新倉さんとは何回か授業の在り方についてお話をいたしました。いつか委員会の集まりがあったときに、テキストは作らないという結論になった。ただ、田所（則和）さん（相模原）の作った労働条件通知書、川名（隆憲）さん（横須賀）の作った働くルールの解説・給与明細比較表、全国の最低賃金表を共通資料として使う。それ以外は各講師のメッセージ性が大切だということを高橋（修司）さん（厚木）が強く主張したんです。

——当会の学校教育活動は他単位会からも注目されていると思いますが、実際に当会のように活動している会はありますか。

当会のやり方に同調してくれたのは、埼玉会の荘司（八恵子）さんですね。当会の活動に前々から興味があった荘司さんと僕がたまたま会う機会があって、「一度見学に来て」という話になった。平成24年1月、埼玉会からは荘司さんと広報担当数人、こちらは新倉さん、中村（雅和）さん（藤沢）、山田（道代）さん（横浜南）、と僕で、うちの実態をざくばらんに話した。そして、横須賀市立公郷中の授業を埼玉会所沢支部の方々に見学してもらいました。

——他単位会や他団体でも出前授業をしています。当会のやり方でいいところはどんなところでしょうか。

テキストを作ってしまうと、講師が「ここからここまででいいや」となってしまう。また生徒の側もテキストがあれば「後でテキストを読めばいいや」となってしまう、のめりこんで話を聴くことはない。特に中学生にとっては興味を引く内容ではないから、授業としての効果が薄れてしまう。「少人数で一人ひとりと対話する」という姿勢と、学校の要望にもある「働くとはどういうことなのか」ということに応えるには、マスプロではダメでしょう。働くことをテキストにすると、ありきたりの授業になってしまうんです。

働くということをそれぞれの社労士の体験と識見を使って訴える。ルールを教えるのは誰がやっても同じだから、資料として統一的なものを使う。社労士会の中での我々のやり方は非常に独特なものになった。それが良かったと思っています。

——授業をするとき、学校側にどんなことをお願いしていますか。

基本的には2時間の授業をお願いしますが、学校側の事情があるから、なかなかうまくいかない。ただ「働くことの意味をしっかりと考えてもらいたい」「みんなは労働法によって保護されているから、安心して働いていい」という2つが伝えられるようお願いをしています。これは中学も高校も変わらないです。

——お願いを受けた学校側の反応はどんな感じですか。

横須賀市立の中学校などは事前準備を行った上で我々の授業に臨んでいるが、現場では偏りが出ないように苦慮されている。それを第三者の社労士が言うことがいいことなのです。それに、教室ごとに社労士が少しずつ違う内容で授業するのがいいそうだ。「僕はこう思う」「僕はこう考える」ということが講師の生の声でいいのだという訳ですね。

——講師の中で印象に残る人は。

色々いらっしゃいますが、田所さんの場合は、彼の中には働くということの明確な図式がある。クイズ形式や「今自分たちは屈託なく授業を受けているが、エチオピアの少年たちはそんな状況ではない」という話を織り交ぜながら、「自分は一人ではなく家族がいる、子どもがいる。それが生きるスタートだ。結婚し、子どもが生ま

れる立場になったとき、愛情が自分を諫める。これが働く源だ」という話をしたが、それが強く印象に残っていますね。

それにもうひとつ印象に残っているのは、県立平塚ろう学校中学部の授業です。地域で活躍する社労士の先生からの紹介で実現しました。事前打ち合わせや授業のやり方について、いろいろと学校の先生方からご指導をいただいていたのですが、手話通訳の先生を介しての、また、ビデオ画面を使用しての説明がなかなかかみ合わず、最初は学校の方からかなり厳しいご批判をいただきました。しかし、担当講師である卯城（恒生）さん（横浜西）と竹林（彰子）さん（横浜北）のご尽力の結果、3回目の授業から軌道に乗り、その後毎年授業の依頼がきています。行きつくところ、コミュニケーションの方法に工夫を凝らし、話の内容は通常の中学生の場合と全く変わらないこととし、こちらの話した内容がわかっていたかどうかを生徒さんの目の輝きや表情などから確かめるという基本に立ち返えることが大切だと改めて気付きました。

——では、学校の先生で印象に残っている方は。

いろいろなタイプがいらっしゃるけれども、横須賀市立中学校のK先生、I先生ですね。この方々は熱心だ。職業体験授業・社労士の授業と進む前に、まず自分を知ること、それから自分が世の中との対比において何ができるか、自分に何が足りないか、その中で自分が働く意義は何かということから職業選択へ導いていく。夢を持って職業を選びなさい、そうすれば働くことに責任を持つし、意欲も出るし、能力向上に対する努力もするし、と結びつける。I先生が考える授業の形があって、ある部分を社労士にお願いしたいという風に授業を依頼されます。

最近あるケースとして、生徒の多様化が挙げられる。所得階層の差が多様化につながっているのではないか。例えば、家族がいるのに自宅からではなく、児童養護施設から中学に通学する子がいる。すごく複雑。それは、社会現象の中で出てきているんです。

——そんな社会現象はこの授業を始めた頃にはなかったと思いますが、学校からの要望は以前と変わってきていますか。

一時、ニートで引きこもって何をするのも嫌で、出てこないということが心配だった訳だよね。しばらくしてニートという話はなくなって、「自分はここまでだ」と自分の範囲を決めつけちゃう。格差社会が若者にまで影響しているんだなど。

それから、先生の方から「言葉遣いに気をつけてほしい」と言われるようになりました。

——生徒で印象に残る子は。

中村さんの話。車イスの子が普通に教室で授業を受けている。その子を見かけて、気遣って障害年金という言葉を出さないようにした。で、授業の最後に彼が「いろいろな子がいるよね。でもそれは自分の欠点ではないんだよ」と言ってあげたら、その子から大変感激され、涙をこぼされた。「我々は授業をする相手に気を遣わなければならないし、そうすれば相手にも感銘を与えることができる」と彼はよく言いますけどね。

——中学と高校で授業に違いはありますか。

最初の頃はあまり差をつけなくて話をしていたけれども、横浜旭陵高でルールの話になったとき、生徒たちはアルバイトをして知識があったから、冷めてしまって生徒は好き勝手な話に移ってしまった。それで高校では途中から言葉を変えて、知っていることを前提として話をするようになりました。体験があるかないかですね。

——講師数が増えてきましたが。

この1年で横浜南から4人、藤沢から1人増えて、今は46人ですね。地域も分散されてきて、川崎・藤沢・

相模原の会員が多くなりました。

この前の講師会議（5月10日～11日）で少し厳しく言ったんですけどね。講師は一生懸命レジメを作る。レジメを送ってもらって、僕が添削する。働くこととルール、これを切り離してはダメだよと。皆、最初にルールを持ってきてしまうので、まず働くことが先、そして私たちはルールで守られているんだという授業の骨組みと、労働基準法と言うだけではそっぽを向かれるから、日常の言葉でなるべく易しく話そうと言っています。それと、何から何までたくさん話そうとするんだよな。全て言おうとすると、生徒は飽きちゃう。まず3つか4つに重点を絞って、自分のペースだけで授業をせず、相手を見ながら、場合によっては2つにしてもいい。後は考えておきなさいね、と言って課題にしておいてもいいんです。最初に失敗するのは、授業の最初から終わりまで自分で言いたいことを全部言おうとして、時間の経過も何もかも忘れてしまう。そこは気をつけなさいと。

たまたまこれから講師デビューをする人が「今悩んでいます」と。ちょうど中学生のお嬢さんがいて、授業のヒントを探ろうとして娘さんに「何になりたい？」と聞いたそうだ。すると「サラリーマンは嫌だ、漫画家になりたい」と言うものだから、授業で何をしゃべっていいかわからなくなっちゃった。でもそれは違うだろう。働く人の15%から20%は個人事業主なんだから。何も雇用労働者だけじゃない。問題はなぜ自分がこの仕事を選んだのか、自分の夢は何かが先なんだよ。そこから入るのが必要なので、このお嬢さんは話の対象からずれるものではない。むしろ家に帰ってお嬢さんともう1回ディスカッションして、その人たちを含めてどうするかを考えなさいと言ったんだけど。例えば、個人事業主は基礎年金だけでしょ。それならば自分の生活設計をどうするか、自分で構築しなければならない。厚生年金がないんだから。講師の多くは、サラリーマンを前提に話を進めてしまっているんだろうと思う。

——授業で講師が取り上げるテーマはどんなことでしょうか。

どの講師も他の講師がどんなことをテーマにしているかを気にしていると思う。情報を共有化したものが欲しいのだろう。

最近多いのは、契約関係から入る授業だが、別な切り口も考えられるでしょう。

——政治連盟と一緒に活動するときのスタンスは。

学校が授業をするかしないかの選択をする場合、議員さんからの情報だけではなく、他の学校など横のつながりもある。その情報のひとつとして議員さんのバックアップが力になっているので、政連にはPR活動をお願いしますと申し上げている。今、横浜市の受託がないから、横浜市の議員さんをターゲットにPR活動をしようという話になっています。

社労士が地元の議員さんに働きかけて授業が実現する例もある。ただ、ひとたび校長先生が授業をすると決定したら、どこから授業の話が来たのかは関係ない。校長先生や担当の先生が我々を選んできたのだから、我々は誠心誠意、授業でその要請に応えなければならない。先生と一緒に授業を作り上げることが成功の道だ。そこを踏み外さないでほしいと講師会議でも強く申し上げました。

——学校との打ち合わせはどんな感じですか。

学校への訪問は1校1授業について1回は必ず行くようにしています。学校側は何らかの情報で授業を依頼しますから、まず電話で事務局に連絡があって、その後、学校と打ち合わせの日を決定する。そして学校に訪問して、要望を聞く訳ですね。

こちらからのお願いと学校からの要望事項、授業に関連する前後の教育内容、生徒さんについて特別に配慮すべきことを聞くんですね。そうすると「家庭状況がこうだから気をつけてほしい」とか出てくるんです。

——学校訪問は誰と行きますか。

委員は地域ごとに担当があって、例えば横須賀は新倉さん、川名さん、横浜方面は山田さん、藤沢・茅ヶ崎は中村さん、相模原方面は高澤（厚子）さん（相模原）、川崎方面は佐藤（修子）さん（川崎北）で、僕は殆ど一緒にしています。

——委員長は大変だと思いますが、委員長が学校に行けば、どこも同じスタンスで打ち合わせに臨めますね。

そこが事前打ち合わせで大切なことだと思う。なぜこの授業をやるようになったかを学校側がざっくばらんに話せる。ある先生が前に授業をいいと思って、転任先でキャリア担当になって実現させたとか、校長先生同士の交流の中で授業の評判を聞いたとか、嬉しいよね。

僕の体調が悪くて声が出ないときに高澤さんと打ち合わせに行った。担当の先生が授業の評判を聞いて依頼してくれた。高澤さんと庄司なら安心してお話できると言われましてね、声が出るようになっちゃった（笑）。

——横浜には広がりそうですか。以前の授業では反応がよかったと思うのですが。

努力する必要がありますね。平楽中は担当の先生も保護者も非常に積極的だった。もう一度、教育委員会に話をしないとイケませんね。

初めに行った西区の中学は、けんもほろろだったよ。1時間も話したのに何でこんな授業をやらなければならないんだよと言われて。それでも校長会に來いと言われて、業者に混じって5分間、資料を渡して説明しました。

——川崎の高校の社会科の授業時間にやったこともありましたね。

社労士のお母様が会報の記事を見て、娘である社会科の先生に話をして実現した。まとまった授業時間をくれないかをお願いをしたが、どうしてもだめだったので、社会科の授業の中に講師を当てていった。講師一人あたり2日、学校に行きました。ある日は朝8時集合だったり、またある日は午後3時半に集合だったり。

——この学校の授業で噛んで含めるように話をしたら「簡単なところは飛ばしてほしい」と言われましたね。

進学校だから、自分たちは将来を嘱望されていると思い込んでいる。一流大学に行けば安心だということで。ここは校長先生が「うちの生徒はどこへ行っても指導者になれる」という考えだったんですね。

進学校では高校時代にはアルバイトをしないので、自分たちには関係ないと思っている。でも、大手の企業に就職してもいわゆるブラック企業だったり、大学でブラックバイトの被害にあったりしているのにね。逆に悲劇を作り出すんですよ。

——子どもたちの印象は以前と変わりましたか。

そんなに変わっていない気がする。ただ、情報が多くなった。「ブラック企業は」と平気で言うようになった。だから、なおさら正しい情報を伝えていかなければならないと思いますね。

——今後の講師への希望は。

今までは年に22~25校、平成27年度が最も多くて27校の実績だった。ところが28年度は12校に激減した。これは中学の卒業式の日程が繰り上がって、先生もスケジュールのやりくりで苦慮していたという理由もありますが、果たしてそういう見方だけでいいのか。それをこの前の講師会議で投げかけたんですよ。そうしたら、すかさず委員から「社労士の授業はこんなものか、と思われ始めているのかもしれない。これは非常に怖いことなので、そういう視点に立って議論をしなければならぬかもしれない」と。考えてみると、最初は平成15年に活動を立ち上げた人が中核となって、授業をやってくれた。自分たちが生徒に対してどうメッセージを与えるかを真剣に考えながら授業を進めてきた。学校ごとに事前の講師会議をしていたが、新人講師が増えて学校数が増えるにしたがって、情報をペーパーで伝えるだけになってしまった。ネジを閉め直さないとという共通した認識

を持った。飲み会も車座になって、今年は熱っぽく語りました。

——車座ではどんなことを話しましたか。

平成15年の初期のメンバーにはこんな思いがあるんだよとか、生徒の感想文を読んで「自分がやったことを書いてくれた」と満足しているのは間違いだとか。自分が授業で力点を置いているところ以外を感想として書かれると、ガッカリする。「何だ、そんなことを書いてきたのか、俺はそんなことを言いたいんじゃないのに」というすれ違い。そのすれ違いを悩みとしなければ、講師失格だと思います。

——では、理想の講師像は。

社労士の枠を広げて、世の中をよく見て、今の若者は何を考えているかに着眼して、将来どうしたらいいのかと親のような立場・気持ちになって、真剣に考える人。そういう意識がないと成り立たないですよ。それはお客様との関係と同じだと思うんだよな。企業には欠陥もあるかもしれないけれど、思いがあって信頼関係が生まれるんだと思う。中学生や高校生はすぐにお客様になる訳ではないけれど、次世代の人に対しても同じ情熱をもって接していく。我々は単に授業を仕事としてやっている訳ではなくて、広い意味でこれからの世の中をどうするかという一翼を担っている。そういう視点で若い人と接してほしいと思うんだよね。

生徒当人にとって、聞いても聞かなくてもいいことをこちらに向かせるのは大変なこと。相当な努力が必要だし、我々は授業を使命として取りかかったんだから、学校の先生や生徒さんに対してどう応えていくかを考えることが、我々のすべきことです。

それから、これは是非言っておかなければならない。当会の貴重な会費の一部から経費を使わせてもらって、我々は将来の布石として第一線で社会貢献活動をやっているんだから、その期待にも応えなければならぬ。もちろん直接のお客様は生徒さんや学校の先生だけれど、我々は当会に対しても使命を負っている。だから、ひとつひとつの授業を大切にしてほしいと思いますね。講師の人たちは支部長から推薦されて、委員会でも支部における役割などを調べて選んでいる訳だから、選ばれている人たちです。手を挙げたからできるものではないという意識・責任感を忘れてはダメだよ。その認識がないと先がないよということですね。

——将来の委員会全体の姿がどうあってほしいですか。

中学・高校は活動をまだまだ広げていかなければならない。今まで授業を受けた生徒数は約3万人。よくワークライフ（支援委員会）は華々しくやっていると言われるけれど、学校の数からすれば、まだ授業を受けている人はほんの少し。やり方によってはまだまだニーズがある。

それから、そろそろ大学でやったらどうかという話もある。県内には大学が数多くある。大学生は明日からブラック企業に直面する可能性がある。彼らには今こそ踏ん張ってもらいたいから。ただ、大学の場合は授業内容をガラッと変えて、社労士の専門性を打ち出した授業をやっていかねばならない。ビジネスとして展開できる可能性もありますね。

——最後に、庄司先生個人として今後この活動にどう関わっていきたいですか。

講師でも何でも、関わっていけるのならできるだけ関わりたいですが、決めるのは委員会なので。新しい方向へと進む中で、お力添えできることがあれば、いくらでもお力添えしていきたいと思っています。

今後も授業に関わりたいという庄司先生。ぶれない信念と熱い思いはまだまだ続く。

（聞き手 小宮広樹、吉川史子）